

會津八一全集

第五卷

會津八一全集 第五卷

定價二〇〇〇圓

昭和四十三年十一月二十日初版
昭和五十二年六月十日四版

著作権者 會津蘭子

發行者 高梨茂

印刷者 山元正宜

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一
電話(五六一)五九二二
振替東京二一三四

編輯者例言

一、この第五卷『短歌 下』には、既刊單行本の『自註鹿鳴集』・短歌の「補遺（續）」・各歌集の「序跋 例言」類・「山光集 自註」「寒燈集 自註」・「鹿鳴集 索引」「山光集 索引」を收め、さらに「俳句」を附載した。

一、『自註鹿鳴集』は昭和二十八年十月新潮社發行の本を底本とし、新潟秋艸堂殘存の著者書入れ本二冊及び自筆訂正ノートにより、およそ三十ヶ所に改訂増補を加へておいた。『自註鹿鳴集』の歌の表記は、上句・下句に分けてあるが、この點は本集にそのまま踏襲した。さて語分けの方法であるが、前集第四卷『短歌 上』の例言にいつた『會津八一全歌集』と、この『自註鹿鳴集』とは、著者の筆先き大いに變化し、且つこの本自體においても前後矛盾するところ少くないので、すべて『短歌 上』において決定し實現した方針をもつて貫くこととした。また『自註鹿鳴集』と第四卷『短歌 上』の當該部とを校合すると、二十數項の差違が見られ、綿密な讀者に奇異の念を抱かせる懼れがあるので、「編輯後記」中に一々指摘して參考に供した。『自註鹿鳴集』には、この部分だけの目次を附した。

一、本集の校正進行中、作者自筆の『秋艸道人詠草』二冊を某氏方に觀ることを得、われらに未

知の短歌四十七首を採取する幸運に恵まれた。この外に「旅愁」の拾遺一首、書翰の歌一首、豆帖の歌一首を加へ、計五十首をもつて「補遺（續）」の項を成した。但し、これらの作は道人が生前歌集を編むに當り、全部その資料中にありながらも、自ら棄却し去つたものであること、「短歌 上」の例言をそのまま、ここでもやはり繰返し斷つておかねばならない。それはともかく、これによつて前集・本集の歌數總計は、千三十六首となつた。

一、著者が生前上梓した諸歌集の序・跋・例言・後記等一切の文章を總收して「序跋 例言」の項を設けた。これはひとたび『會津八一全歌集』において實行されたことであるが、ここではその際洩れた「南京餘唱 序」「鹿鳴集 この集を『創元文庫』の一冊として世に送るに臨みて」の二篇を補足した。全歌集以後の二著の文四篇を附加したとはいふまでもない。これらの文章も本により版によつて多少の差違があるが、素より最後に加筆したものを主とし、思ひ違ひかと解される箇所だけについて前稿をも參照した。また歌數その他の客觀的な誤りは改訂した。

一、「山光集 自註」は繁簡二種あるが、ここには六十九條の繁の方を用ゐ、後に示された簡の方によつて二三の謬りを正した。「寒燈集 自註」は初版本になく、重刊本にはじめて現はれたもので、それをそのままここに掲げた。右二自註共、「頁」「行」の數字は、全集第四卷「短歌 上」に合せて新たに指定した。

一、「鹿鳴集 索引」「山光集 索引」も、著者の意を酌んで收録した。「頁」の數字、前者は本

集第五卷に従ひ、後者は前集第四卷に準じた。語の配列は嚴格な五十音順に正した。

一、「俳句」の部は、著者生前に句集の編纂がなかつたので、このたび博搜して得た百八十五句を内容とした。これが實際の制作數に對してどのやうな比率になるかはわからぬが、今は一應これをもつて満足する外はない。これらをまづ「年代明らかなる部」と「年代不明の部」とに大別し、前者はあらまし年月順に、後者は新年・春・夏・秋・冬・雜に分け、各季にあつては、時候・天文・地理・生活・行事・動物・植物・雜の順に配列した。（但し一句に二季題を含み、決定しにくいものも二三あつた。）濁點を施した外は原文のままとし、不審の起きさうな箇所には（ママ）の傍註を附した。なほ本文及び前書きにつき、必要に應じて編輯者の註を施した。

一、本集の校正につき、明らかな誤植と假名遣ひの謬りは直した。但し、「ん」「む」の同一文における混用は、そのままとしておいた。

一、その他の繁雜な事項は卷末の「編輯後記」に記した。

目次

編輯者例言

自註鹿鳴集

自註鹿鳴集 目次

三

補遺（續）

秋艸道人詠草 第一冊抄

二九六

秋艸道人詠草 第二冊抄

三〇六

旅愁 拾遺

三一七

書翰の歌（三）

三二八

豆帖の歌

三一九

序跋 例言

南京新唱 自序

三二三

南京新唱 凡例

三二六

南京餘唱 序

三二九

鹿鳴集 例言

三三〇

鹿鳴集 後記

三三五

鹿鳴集 この書を『創元選書』に加ふるに當りて

三四五

鹿鳴集 この集を『創元文庫』の一冊として世に

送るに臨みて

三四七

山光集 例言

三四九

山光集 後記

三五一

山光集 改版に當りて

三二五

寒燈集 自序

三二六

寒燈集 重刊本後記

三二七

會津八一全歌集 序

三二九

會津八一全歌集 例言

三六〇

自註鹿鳴集 序

三六九

自註鹿鳴集 例言

三七一

山光集 自註

三七三

寒燈集 自註

三〇一

鹿鳴集 索引

四〇一

山光集 索引

四二九

俳句

年代明らかなる部

四三七

年代不明の部

四五六

編輯後記

自註鹿鳴集

自註鹿鳴集 目次

南京新唱	五
山中高歌	一〇三
放浪險草	一一一
村莊雜事	一四七
震餘	一五七
望鄉	一六五

南京餘唱	一七一
斑鳩	二〇三
旅愁	二一一
小園	二二三
南京續唱	二二九
比叡山	二四一
觀佛三昧	二五一
九宮鳥	二七一
春雪	二七九
印象	二八五

南京新唱

明治四十一年八月より

大正十三年に至る

南京・なんきやう。ここにては奈良を指していへり。「南都」といふに等し。これに對して京都を「北京」といふこと行はれたり。鹿持雅澄（カモチマサズミ）の『南京遺響』佐佐木信綱氏の『南京遺文』などいふ書あり。みな奈良を意味せり。ともに「ナンキン」とは讀むべきにあらず。

春日野にて

かすがのにおしてる つきのほがらかに
あきのゆふべとなり けるかも

春日野・かすがの。若草山の麓より西の方一帯の平地をいふ。古來國文學の上にて思出深き名にて、今も風趣豊かなる實景なり。

おしてる・照らすといふことを、さらに意味を強めていへり。この歌を作者の筆蹟のまま石に刻りたる碑は、春日野の一部にて古來「とぶひ野」といふあたりに立ちてあり。『古今集』に「かすが野の飛火の野守いでて見よ今いく日ありて若菜摘みてむ」といふ歌あり。そのあたりなり。これを見ん人は、その位置を春日神社の社務所にて確めらるべし。

うちふしてものもふくさのまくらべを

あしたのしかのむれわたりつつ

うちふして・「うち」は接頭語。次に来る語を強む。
ものもふ・物を思ふ。物思ひす。

つのかるとしかおふひとはおほてらの

むねふぎやぶるかぜにかもにる

つのかると・「かる」は「刈る」。鹿は本来柔和の獸なれども、秋更けて戀愛の時期に入れば、牡はやや粗暴となり、時にはその角を以て人畜を害することあり。これを恐れて、豫め之を一所に追ひ集めて、その角を伐るに春日神社の行事あり。この行事に漏れて、角ありて徘徊するものを誘ひ集め、捕へてその角を伐ること行はる。ある日奈良公園にて散歩中に之に遭ひし作者は、その伐り方の甚だ手荒なるを見て、やや鹿に同情したる気分にて、かく詠めるなり。

むね・棟。